へ 5
4334
3

是より別して勝負を決
立ての心ハ英雄乃臣を以
て誅ちるを所神妙也
邪境の条のる第一
成るとして白綿つきの
放ち名東ハお坂山南ハ
立田西ハ穴生小ハ有乃
乃鎮護をなとそ先一ツ
の聖書を認る事
治雞坊乃何某筆を
取て田饒の詞をかゝ蘇
祭り謀を題して神明

日へ5
第4334
巻3

納受の志を乃屋しうの
南の清水を汲て頂禮

三十六合

春風の心かなるもうれしき家雞乃麝
二字より次
佛節會の夢なるを告るの鶏の家鴨哉 底下
是よりをのの音乃新年歌仙
乃左坐なのとゆるる空の天鵝

て麝をふるをの軍配い云
曲をつくれり
右みてたのむの名い春震
うをとんまて旅丁とゆうを
なる家鴨哉立ちて
牝雞乃朝々ものもく押うる
留主居役に付うを変切て
附うう其身の立居重く大
声をあげて勤番おのの也
道戯てあひる傳兵衛とて
ひく乃笑ひ云のなりの

廿七句

桃花雨そは竹の葉乃みさゝれ足　其角

二字トス

五六間迯てゝ返る尾ぬきかな

清明の節大雨ときりて思ふ

敗軍次稲麻竹葦に入乱

ゆゝしきの去るゝ尾ぬきかゝり

何ものゝ去るゝ落書

雞去テ昼竹葉トとゝ句を書

捨ゝゝ見ゝ丑山汎の僧雪乃

礫句テ犬走生梅花ゝとゝ

對たるとゝ乃とゝを時ふとゝて用ひる

とゝ桃花雨ふゝるゝ羽翼

ハ醜しとゝ

男涙乃とゝて返しなるも晴て後

一ゝゝ尾乃ゝ

乃鶉ゝとゝを尾花涙

廿八合

白綿付乃黒て仕て取巳日ゝ

一　乙字

桃節ゝ

異出乃男白綾のふゝ

先ヲ出ぬんを出られしを願角
力の心なるら酒陶氏とんゆら
立髪枝乃葉にちさみ胴骨
つんとりとし卯斗樽のとくれく
ふとうう桃花の酔ちんと巳乃
日の精を絞力量いくならん
卅九合

くい吟胴迫をいる　鳥甲
捕距武とん
絞問て色並をとを撫もお　素琴
し字ちい
中入しをたしめるふ房乃

後ん心得ぬ業也字士の煙
乃かひ也ちんかひ乃歯ゑみ
きうをたし　牝雞晨ゆを
ヲさはいみとをたく伝を象も
らく先ちうを鹿必らとい る詞を
ちうたし　梯も心をつけて先く
しむ乃　力乃出る寂中をを
四十合

茶筅尾て鍵をたくいをみうれ　習奥
左右ひ字
為みきを當ふ　みも　距　於　其角

茶瓶蛟にくらる尾にくらるゝ
二十二番目のたゝき毛も手弱き
方也てかつ〳〵の雑言ばかり
崩口なる者ゝそおもた
四十一合

鼻ふさゝを味方へ引や番　椒　雪花
毛とゝ

油断殿空辯ハたゝる庭　堇
二字
嚴女乃水ゝ舌ゝ三伏の番椒
に鼻の汗次辛烈乃氣多ち
頂平へ面してあふ沒の色る

男寒相撲急る事ハ
味ハ〳〵ゝ〳〵ても〳〵ゝ〳〵
空辯してつきたる次手もあり
とれハ不ハ乃心ゝけ者ハ
なけて未意をあ也
ハッ立七ッ起ハ関乃東の兵
卯十二合

兵と郎ハ
二字
足田鶴乃鰐口乃負て傍
桃李不言乃詩兵と褒美の上

うらぶ州丈ををしけ行る一言誠は
かしけ原トミとのひ出されて
桟鋪より此花をこゝ原
足田の物の世来ハ伊勢の国
是乃裏ハはもきいちくてゆる丈 慈鎮
はふよのせても洗ふはりなり
成乃高さに松詞を置れくり
はるつく雪の法ともいてそと
鶉丸のともいひつけ侍とを和
きのふくうらの丸の海をそも
繪なる乃ゝとの評判かくふ
市家乃ゝ世界まかくらる

卯十三合

いとめき木乃芽をかく距丈 右此

胡葱 三字源氏 誓古問
是彼引用伊勢物語
雞乃坊主 ゆる若なる丈 間指
先蹤正 われふ双ふをゆ
垣を勇ふて岡を合まれこゝ
なるめとその人ゝ者ゝまゝ家乃
右ハ時節お慮乃むをし世也

負手ハ味噌をつきまぜるとかも
いふべきなれども巧言世方この糜貶呂
なりてハ酢乃過きしるとも
言われぬるもそれもまた
敬味噌

廿四合

八乃字ハさかの寄まて警醒

左右ニなるとも

嚢利を毋れひるまぬ蚯蚓ハ吾ニ

酔ときしむとりハ好悪の

詞なしたゝ必ふるなりなるべし

朱冠ハ距ニ来なること

ひるまぬものハ性得自然すなく

ぬるひなるハ又河津殿の侍ハ

一方箱王毋ハのゝ仏ハ甘毋房を

備えて毋衣ときハ羽袴をきせ

ゝたるハ樊噲をもなるべし

ものハ

卯十五合

血盲乃幾庖丁ハ彼ハ密耕竜 棹孤

尾雫も緋桃ハ涙てくるいう 百猿

二字ハ

雞籠の山路あんとうるる時
ちゝ原間こゝとてうゝみ音を
啼うつをみちあり蜜柑の皮春の
紬代の重ねをかゝる籠に入られ
是をつゝして三羽と知る口惜かり
血盲也若武者ふたりも目を
かけ作るもをの冠をきそひ先
て紅桃乃蕚もねしむ色
冠重呉天雪ふるかゝ
楚地乃花もをのしる
かとい書て後しるるんゝ
四十六合

撫物を兎羽乃下ゝ難波寺
二字ゝ
南京乃引音を猛て水空 毎閑
乙字ゝ
天王寺の拾物後記みゝ
所大坂矮雞の下ゝ丈手に
ゆゝしゝゝ今ゝも兎羽の
乃尾ゝ白ゝも煙ゝ
是源氏の墻ゝ南京の小太郎
作ゝ丈ゝいゝれて尋常ゝ
引音を源大勢を合ゝふ
中ゝれゝ水天ゝ

乃反ふたり関路の者も
声こにすゆ
卯十七合

足病乃かしは事や　脚　疲　花月
乙字
朱冠癖に用ふ三月待れ
烏医卯の日足やみ乃いき手
脚折失盡てを方
是當分乃弱を望い手なふ
あつかふ乃ふの冠癖布宵に
一ふ六ケ補病や営皇を病

鷹氣欝に寒苦鳥風寒乃
多ふい良藥を得ふ
乃て此病乃ふと漢家乃
む一至癖發の青茅に
ふ多ふふ命運を全して
きふく命
かふねて軍ふ
四十八合

陰を蹴て巴を負一脂気　食　笹分
乙字
雞肝二人　静を合を
戴冠文ふ

此牝頁を七線の中
迫まるこゝまさらなるかの洛気
陰とは名乃博ある四辰と
なるを第一おてを盗をこゝをて
横嫌らを振興ある乃栗ぼ
乃ある乃を放されて後いつち
乃なん其場をも大あるこ
こゝをあるこゝ三芳野乃奥乃
丈菜畠又放さを美雞あり
元徒おやこゝをしこゝく其
影を作らをてたるも
合なるを一野たるを さて



てを二人 靜
卯十九合

沼津より足高山や大槽 土朝
もとに
鳥乃ゑへをかんやり乃雞乃ア
二字よ
清水の関取乃血脉原吉あを
乃をを宿ゑを只乃利ゝ
共也みゝ乃ゝ
名言を君とも同ゝ
をもとをて目出あの
不ゝ乃なゝ

傷る芳野唐土なるも春ふ
翅ハ薫物し化紅粉化粧して
花美をふ人の心をふ傷る
迷をを花ハ後法度ハ命と
なるもみなかハ放ちやるぬかの
箒木の是をハ
身のうちをあけくれなるそのる秋ハ
とりかまてを音もなるれる
うつをみ乃奇也此心ふ
とを
五十合

傷口ハ推るも啄ハも嘴て門
戴冠文トス
傳大士ハを雞驚うゑひ〻〻跪合 依以
今ハ寺こ乃雞を召ゑ推敲
三年の執乃すて推ハ力啄
ハ品也韓退之是を相手
て以鳥鳴春と世上ハ乃りて
一らを〻〻輪藏乃三影う
ちまきあをを刮て空ゑ
きしこ場ゑ〻〻とんづを
乃狂ひうを笑へ

五十一合

柏手のかつ色をとかハ臭負　辰下
左右色とハ
尾とる影落　雜　百之

社頭ノ雜かよき寄合此
をきつたんとの柏手ゝ松柏の
霜の後きをとるも各浪入
角力ハ笑ものの
神山乃柏乃平手ゝとるき
樂番もの
五十二合

唯ハ血臭ひ皆を
五字　雪花
頤罪ハ赤ゝ酒乃いとゝかも　雪花
捕距武
ハ也ゝ也言しかる業を
得て舞ゝ色とひ瀧とひ傘
ゝ子ゝ子ゝ
月ゝ妹冠ゝ
出ゝ頤ゝ今ハ
此鬼酒を力とハ共かれハ佛力
とひ神力をゝ

五十三合

瓔珞の深ぬ洲こゝ無垢ろ〻 勝

左右ひ字

筋肩乃破軍をとる和花の里 志水

瓔珠おなきら浮身洲んて 沈

ひ孫水孫こゝてんとう笛晴

仏肩ホ星乃ゆ祈きかつ

手合乃ゆ差切ゆ屋

花とゆ桃花乃陣をゆす

ゆの和

五十四合

引色も日出の煤乃塒鶏毛

五字

相羅乃勢を越ゆ花星り 習奥

ひゝ七巻毛乃夜乃月

月色とかよゝ弘詞 正廣ゝ

日頃の袖すとらひ ゆ引合を

向上乃ひとつと雑人暁分唱

経声明王の眼を驚うす

ちゝ毛お運屋乃花 軍

一も千ゝ合をゝは心も

ゝもゝ毛

五十五合

雑煮乃追手い粱の紅葉 分

土餅うら豆腐ふりし君よ歌 鳥子

二對乃若目い立ふうらなねて
はあもちつるぬ所なり是い
雑煮や同じさしの紅葉頁
とはふふ丈品ふれはるる
紅葉鳥鹿おかさるるてうた
新茶の図者塲ゐ食ひてを
乃うとうふをんふ力 紫

角力乃外他ふ品を土
餅とらふる豆腐の祝うふる
蒲菊の白ふもなやしまく
五十六合

時下に後悔もなり蹴合ゐ百樓
こ字 右二字
堀地乃昭を嬬の鉄輪ふ
ふうふる樽の示にのなり
て睦ふる丈物目をさはた
乃度ゝ也しり食つきて
時下りしうをおふ五しり

空腹の病負後悔すること
三足のわしと輪なる世の中の余り
ものにもかりてかむることもかな
効をとうとうみぬ中古野出の三郎
と云ものの片腕を切らるる骨を
皮引かるるをてんぐるかりしを
駕すると肝の根より引切て捨
とうとう素盲門とふりて片枝と呼ス
此意地なかりをとうとう
五十七合
欠仏の木乃根撰かば若干合其角

砂水ふ去る息をを古湘江
捕距武
昌子木の根なりと猴の方のいし
子負後たてしも道理古湘江
昔反正乃唐織をしつ者
邪慢京慢ら手ふつをし三番打
とうとう此男呂をみーらいら
難かし
五十八合
雌ら毛虫て捌く羽癖ス素
也

いさかひ乃別書や唱ふ昼下り　雪花

潛確類書に雞ハ蜈蚣を以
酒を飲ハ桑椹酒と云と云
其妻醉臭乃羽癖を付く
[illegible]
[illegible]左一廻るもの也　茶白
[illegible]
[illegible]
早天から乃ん物待ち乃助
[illegible]角力揃ハ[illegible]
[illegible]別書ハ長



七十九合

風負乃つまり大ら乃一個ゝ其角
也　右乙
勝軍ハ[illegible]ハ独ハねぬや雄乃役
甲の赤ら毛をつゝみ上る綿
首隠ハ[illegible]也こゝ[illegible]に
[illegible]ゆるの変乃[illegible]
野ハ伏山乃助ら[illegible]白ら乃[illegible]
に[illegible]かつの水を[illegible]
[illegible]見の左忽ち[illegible]
舞の[illegible]

瓢鷺くくる風情

苦くく

六十句

綯突乃時をも同をてんもく　独楽

戴冠文と沢右五字トス

ちわか王小結ゐ産ムまま　髻　白橋

韋駄天乃名ゐ乃ものと

引廻しともよの下界ふり捨よ

ちくなきくく胸を突て絶

入くく溜まれ廻る大独楽乃

くとくく乃泡とくくくと

花月惣一

ちはけしもの辯雑合ゐね

てきくて肝くくくくくる

六十一台

髭ゐの厩かくて鳥いかー

五字

噫にも如ゐとりゐる鳥　伯樂　毎雨

七乃前迄はをりはをく

真黒ゐ毛曙関内もと乃

帝意をゐかむり作　毛

乃ものまの口世界

国土平安にして
只伸嘆嘻心をつくして行相
を見る夷伯樂乃煉齊也
さるべき乃手入今日のつんを見 襟
裾をかさり立さる不當坐はた
夫ものもとも化ならをわらく
鵬乃餌し
六十二句

投打乃屋敷を相手やせつい所
ひとあるとに
今日の関笠童を狂しめかい崎芳
五字くに

伊勢町小田原甲雞犬ともの
中何くに木戸を限つて取合か
童僕の心も亦去りうるめく
獨遊びをすれば惣くのたふ
ひ者とす年比日頃乃意趣を
含て呉越乃名主を煩らは
欠くり昌くに繁花長安乃
江戸気すて飽迄にて照ら
ゆくも也
或人乃いつるく信濃の国大笠也
廿卯もの年世わとけるとおも
乃ち越後乃国荷を荷ひもて

川中島乃手合をんとるを
龍而乃成漢楚の爭ひ是
を末世の味とす爲
六十三合

聊白を生ずるひふ矢壺くゝ辰下
乙字

抱分て瓜乃洗足を雛ゝ酒百之

たゝ六六六前合也をのゝとりく
羽に扎家つ手を放をとゝく
ゆゝるゝ一口も飲まに
手拂りつゆゝ喰ふ

乱れ抱分るもの
走るゝ瓜のををとゝ酒
ひゝりに成しはつゝ
盃者ふうゝ心をゝ
油乃大敵
六十四合

塘をゝ乃いさゝ桃乃花振袖立朝
乙字

碁盤をしいさ函谷へ彌三五郎

塘をゝ乃己ゝ対かゝへて
他の悪黨をを賣くゝ賣

[illegible]八声の鶏頭[illegible]右
孟嘗君の千の[illegible]
[illegible]に世[illegible]
千[illegible]雞術　三千の
容[illegible]越[illegible]
人取り名を[illegible]飛彈[illegible]
掾と受領を[illegible]
昔の[illegible]聲を[illegible]今の
[illegible]形を工[illegible]秋蘭
[illegible]例を[illegible]
史記[illegible]
鶴[illegible]



羽多は羽形なるべし
六十五合　難波は名二羽とも番へ
尾狂[illegible]逆毛[illegible]
左右ひ字
鶏廻り和　淺黄あるひ月士軍　雪花
尾狂[illegible]
雞の獅子はなべて逆毛
此句[illegible]
[illegible]尾狂ひの獅子
なる[illegible]

[illegible]は首尾十分なる[illegible]
を十五年以前乃若氣[illegible]
[illegible]
[illegible]
口[illegible]も牛後[illegible]
[illegible]詞[illegible]
鳥主も伝損淺きを恐
表裏[illegible]仕立榮[illegible]心の
濃[illegible]
六十六合

撮距小荷駄奉行ハ隱密[illegible]習更
[illegible]

くハ[illegible]を[illegible]を[illegible]
軍旗[illegible]用[illegible]
書[illegible]小荷駄
[illegible]の[illegible]候[illegible]の[illegible]陣[illegible]
[illegible]
[illegible]
坂[illegible]落[illegible]
得[illegible]曹司[illegible]主[illegible]
[illegible]損[illegible]
経[illegible]

三十騎ばかりと志せいけて落鰐
拂あるべき由落されしかども強りン
夜軍いかがかたて是を分目
のぼりとくめてて
秘傳乃事ハ
六十七合
力尾の旗ひらめくも穏くみ百之
二字
まとゆの番てをく帰後ハ
徐開引音を合を味方乃条冠
ををゆてをくみのなて

収りの舞羽を引かて起ら
あとゆ濁をれとも穏の一業
力尾の白猛をたりなり
あちらにとくく鄭ちら
関乃秘乃郷前ア
謹上再拝奉
六十八合
陸奥殿乃鎧ちんてしを合
五字
犯弱心の
二字
白足乃先陣後陣
秘土儀苗

はなきしかつらもし　のまへ負
まけのとや詞に和をとゝ置
是も社御きゝはさて御土器
あらそひ市ぶんて心ゆるく
て御陣屋までもあらん相撲
をとり飛の踊なとしてはやし
はやしうたは一条目の制札
をあらて籾俵より内へ入らせ
うちはにも出きとけなまかゆ
ともかくもれを許せらるれ

六十九合



弓士乃家もよすがる鳴尾かな

戴冠文

火啄やはふさへつゞに臆病も　毎閑

二字

落足手負もなく鳴て駒の
蹄よついてちりうせるあり
さ鶏雛乃尾をふる犬乃足を
のらきしいかや道悲しい
淡俗のゐなけきのれと三井なる
みうちぬりは月落ち烏
啼て霜天に満所くれ
篝火消えまゝいしきられ

乃の恩もふる燒藝の雅楽等に
おもふ[illegible]くはのつ[illegible]咲乱
て寒食乃家を[illegible]
身乃上いうとさきたれ[illegible]
異国乃火おすむ[illegible]
今此生鳥ともい屎を出ス
そなて梅を根と肉を大根よ
おし一ふく銀香を刻おもしもも
前世乃業因こそ[illegible]
人乃ふ[illegible]を[illegible]て涙のれ
たふつ[illegible]ひのもも
去ふ[illegible]

七十八合

一番乃勝を佐久間ゝ吹流ゝ　甚角
　五字
　見のかく欣雑ゝ十二揃
諫鼓答深ゝ治雑坊て
塵静世とゝ[illegible]
法師の力ゝ[illegible]
乃条を[illegible]
例年[illegible]萬
戸関を[illegible]
　見十二陽ゝ見十二ゝ

[illegible]貢を決する度十二のかつ[illegible]
勢[illegible]ける比叡委細[illegible]
紀の夜叉千疫を[illegible]
ともを[illegible]
たんとの[illegible]司を貝殻橋[illegible]
[illegible]れん歟い箱[illegible]い袋[illegible]水
引をとらをて鳥の跡を寶
[illegible]正のかつら永し
[illegible]の[illegible]時の
鼓をとらせ奉る

鳥沙汰曰

義安三年五月二日東山の
仙洞[illegible]て雑[illegible]
公卿待従僧徒[illegible]の心面の輩
常[illegible]祇候の者[illegible]も左右を
[illegible]銀[illegible]賢[illegible]て
[illegible]用ひ八尺の銀墓
[illegible]居[illegible]勝の花[illegible]
[illegible]橋樹薔薇牡丹山吹の
作[illegible]花[illegible]て伶人
[illegible]集[illegible]て春閑[illegible]御堂
の山の青山のとらせ[illegible]

篳篥を吹和琴を弾じ
嗟歎乃舞樂をなし
毎両方乃雜を合す

一番
左　右衛門督乃鳥家、無名丸
右　五條大納言の名家、千代丸

以上十二番左勝卯番右勝六番
と記す寄女舞妓奥座敷
絶す此盃を勧む此度
放宴とい つも乃代乃

義談を伝ふ黄昏了
おわりてかの乃く是を此事
中御門乃左大臣殿乃伝
つ事
朝臣書　奉る人経房
乃記なし合を伝るなり
なり　昌家也
なるこれかまて

花乃の後徳を
唐子　合せ

左右總計

麗人　二句
五字　十四句
三字戟　十八句
二字　卅六句
雁形乙　五十二羽
屯　十六距

寶晉齋真筆